

「チュラーロンコーン大学サマースクール参加報告書」

京都大学文学部 2年 木邑 彩乃

このプログラムの主な内容は、タイ語学習の授業と、タイ人学生との共同発表である。タイ語学習は毎日3時間あり、会話が中心だった。派遣準備として日本でタイ語講座を受けていたため導入は比較的容易だったが、導入部を過ぎるとすぐに、授業に付いていくのがやっとというレベルになった。タイ語は想像通り難しかったが、現地の生活に密着した事柄を学んだため、タイでの生活にすぐさま応用できるものばかりだった。タイ語を学んだことは、共同発表をする学生と距離を縮めるのにも役立ったと思う。プログラム期間は2週間しかなく、タイ文字を学習する段階までは至らなかった。この短期間での言語学習を土台にし、今後長期にわたり継続的にタイ語を学びたいと思う。タイ人学生との共同発表では、自らが発表準備をリードするのに苦戦したり、発表の方向性が見えなくなったりすることもあったが、タイ人学生との交流という点では非常に有意義だった。今回、タイ人学生と話したり、チュラーロンコーン大学で開講されている英語授業に参加したりする中で、タイと日本の大学生のさまざまな違いに気付くことができ、興味深かった。その一例を挙げると、タイでは大学生は学業第一で、アルバイトをしている人はほとんどいない。また、クラブ活動に参加している人も少ないようである。課題が多く、学外活動をする時間がないのである。このことから、勉強に対する大学生の意欲は日本よりも高いと感じた。さらに、共同発表の準備の中で、タイ人学生は発表に慣れているという印象を受けた。何かを調べたり、スライドを作成したりすることは、彼らにとって得意なことのようにだった。これら学内学習の他、学外研修も数回行われ、エメラルド寺院・ワット・ポー、アジアティーク、ゴ・クレットを訪れた。タイは上座部仏教が主であり、寺院や僧侶が日本とは全く異なる。エメラルド寺院やワット・ポーでは、日本と異なる仏教文化を目の当たりにした。アジアティークでは、ニューハーフショーを観劇した。このニューハーフショーは非常に華やかで観光客向けのものである。こうしたニューハーフショーが観光名物になっていることから、タイの性的マイノリティに対する寛容さを感じた。ゴ・クレットというのは川の中州で、陶器と王宮菓子で有名なところだそう。想像以上に観光地化されており、島を一周するように延びる細い道に沿って観光客向けの屋台が立ち並び、タイのお菓子や陶器の品物がたくさん売られていた。

私が数ある SEND プログラムの中からタイのチュラーロンコーン大学サマースクールを選択したきっかけは、今年の春に SEND プログラムの一環で日本に来ていたタイの学生と知り合ったことである。その際に、タイ人学生の日本語能力の高さとフレンドリーさに感激し、次回の SEND プログラムでは是非タイに行きたいと考えていた。私はタイに行くのが初めてだったため、見るものすべてが新鮮だった。チュラーロンコーン大学のあるバンコクは、タイの中ではかなり都会で活気に満ち溢れている。しかしながら、街のいたるところに野良犬がいたり、歩行者用の信号がないことがあったりして、日本の都会とは全く異なる雰囲気だった。また、タイは王国なので、街のさまざまな場所で国王の写真を目にするし、毎日国王賛歌が流れると皆立ち止まる。そういうところから、異文化を肌で感じることもできた。2週間お世話してくれたタイ人学生は皆優しく、いつも私たちのことを気遣ってくれた。タイ料理を食べたいと言う私たちを毎日色々なお店に連れて行ってきて、まるでそうすることが当然かのように、夜遅くまで付き合ってくれた。日本で知り合った学生とも再会し、束の間だったが交流を深める機会を得ることができた。

今まで数週間程度の英語圏地域における語学研修には参加したことはあったが、英語を使うことが一般的ではない国に2週間も滞在したのは初めてであった。漠然とタイに行きたいと思っていただけだったが、このプログラムに参加してタイの歴史や文化を学び、また何よりも現地学生との交流の中で、さまざまなタイの魅力に気付くことができた。さらに、2週間にわたるタイ生活は、現地学生との交流によって一層充実したものになった。彼女たちのサポートがなければ成り立たなかったと思う。今回のプログラムでの経験から、今後もっと様々な国の学生たちと関わりを持ちたいと考えるようになり、他のアジア圏の国々や、日本に来ている留学生のお世話、彼らとの交流にさらなる意欲が湧いた。